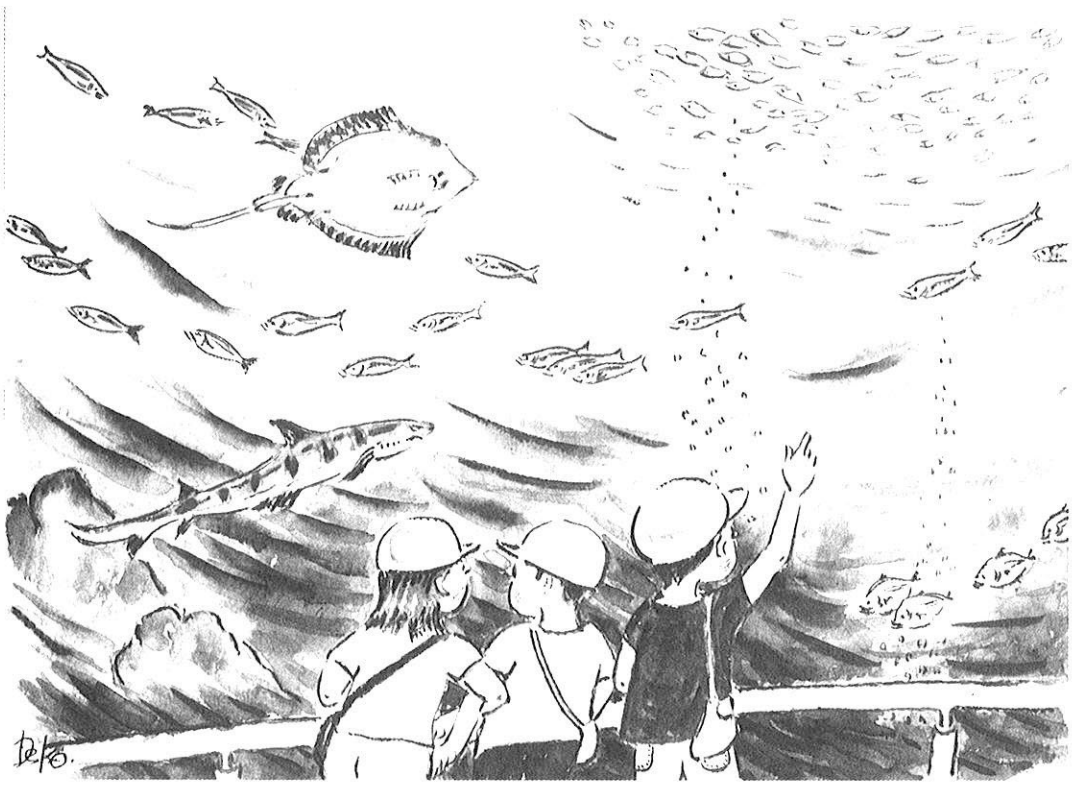
ひかりのこ

光の子

No.120　2006.9.16

●今年の聖句　神は言われる。「あなたを見放すことも、見捨てることもない。」
（ヨシュア記1：5）

残暑お見舞い申し上げます。
おかげさまで元気に二学期を迎えることが出来ました。
お祈りとお励ましにこころから感謝致します。
社会福祉法人　光の子どもの家



「水族館で」　挿絵・中島英子

「ひとりごと」

親王の誕生に秋光るかな
糸とんぼ水面に近き空をとび
ぐんと来てつんと止まりぬ鬼やんま
アンダンテピアニシモ大夕焼かな
花野道花野を出づることもなく
星とんで無言の願ひ残りけり
空を見て秋の真中のひとりごと

落合　水尾
（『浮野』主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会　e-mail:khikari@ceres.ocn.ne.jp　〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

この夏休み、そしてこの秋…

副施設長　竹花信恵

夏休みの四十日間、この期間がどれほど待ち遠しく楽しみだったか、一日ずつ過ぎていくのがもったいない気持ちを感じた子どもの頃、青空と入道雲を見上げては思い出します。

普段は学校、幼稚園に行っている子どもたちのすべての生活時間、ゴールデンタイムが私たちの手元にもどってくる夏休みでした。

「今」ならではの、大切な関係と想い出づくりに、そして、「次」に向かうがんばる力につなげていけるように取り組みました。

今年の夏は例年以上に体にこたえた方々も多かったでしょう。吹きぬける風を求めれば熱風にさらされ、そして、明け方には毛布を被るような気温の差に体調を整えるのが大変なスタートでしたが、おかげさまでこの夏も守られ、皆様のご支援によって、山や海での想い出を豊かに重ねることができました。

夏休み前半は「チャレンジの夏」で、今年も小学生達が、長野県小海町の谷本清光画伯のアトリエに泊めていただき八ヶ岳登山に挑戦しました。心配だったのは、雨続きだった天候と、付き添う職員の体力でしたが、無事、たくましい顔つきで戻ってくることができました。谷本先生や陶芸作家の池端先生のいらっしゃる環境の中にいられた素晴らしさをきっと大人になっても忘れないでしょう。

家族と離れて普段は一緒に住むことができない子どもたちが、できるなら、お正月同様、「家族」を強く意識するこの時期に帰省できるよう、家庭訪問等をしながら調整してまいりました。「家に帰りたい」という想いがどれほど強く、どれほど願っていることなのか、痛いほど感じます。それでも帰れる子どもたちは数えるほどとなり、その分、家庭帰省に代わる楽しいプログラムが加わります。各道路の大渋滞の波に加わって私たちも「家族」のように海へ行くことができました。それらを実現させて下さった多くの方々への感謝を込めてそれぞれの夏の想い出を各家からお届けいたします。

今年度も早いもので折り返し時点に到達いたします。施設長交替という節目の年となり、「光の子どもの家は、一体どうなってしまうのだろう」というご心配の声もあちこちから聞こえてきましたが、子どもたちは元気です。楽しいことばかりでなく、ピンチな状況に立つ子どももいますが、ひとりだけでそれを負うことはありません。ピンチをチャンスに変えていくために、失敗を前進につなげていくために職員一同、子どもたちのための「家」であり続けるよう精一杯努力してまいります。

一方、埼玉県の児童養護施設でのスキャンダラスな報道もこの夏相次ぎました。当該の施設職員の皆様は、顔を上げることさえ出来ないほどの打撃を受けながらのこの夏、子どもたちを守り通したことと思います。そのような状況を考えると、そこに踏みとどまって子どもたちと暮らしをつくるために心を砕いた仲間たちを誇らしくも思います。そんな現場に精一杯のエールを送ることしかできませんが、お互いにどんな場面でも子どもを第一にしながらがんばる仲間でありたいとも願います。

そんなことを含めて、愚かで弱い私たちが、非常に困難な状況の中でのはたらきを全うすることが出来ますよう今後とも祈りに覚えて下さり、変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

続・トムソーヤ達の朝　その6

日本キリスト教団東大宮教会　永野　三恵

真夏の太陽が日中ギラギラと照りつけ、濃い緑の木々と吹きぬける夕方の風に〝ホッ〟と息をつく毎日です。

中学生のさまざまな相談に関わってきた十年の中で、私が心を痛めてきた変化は、子ども達の〝性〟に関するものでした。こんなにも無防備に、無惨に少女達は大切な自分を投げ出してしまうのか……と悔しい虚しい想いをしてきました。

表面的には何も変わらない清潔な少女達ですが、私との信頼関係が深まっていく中で、心の底にしまっていた思いもかけない相談を受けるようになりました。

一九七〇年代には社会現象としてフリーセックスという言葉が流行り、大人の商業主義にまみれた性の情報が子ども達にも影響を与え始めていましたが、中学生はまだまだ〝デート〟という言葉に夢を持ち、お互いを大切にした交際をしていました。

ただ成長の早い男子学生が五～六人群れて興味ある話題を楽しんでいた姿は、昔も今も変わりありません。家庭的に問題を抱え「家へ帰りたくない」と、遊び歩いていた子どもも居りましたが、彼女たちはむしろ〝特別な子〟として周囲から浮いていました。しかし、普通の女の子と言われている子ども達が急速に変わってきました。物質的な豊かさを求め、ひた走りに走り続けたこの国で、家庭や学校、地域で人と人との結びつきが薄くなり、さらにパソコン、携帯電話の普及が拍車をかけたといえるでしょう。電話も二十年ほど前には、どの家庭にも一台で、親が電話を受け息子や娘に取りつぎ、親は子どもの交友関係を知っていました。

こんな事がありました。中学時代に部活の友達関係がうまくいかず悩んでいたB子は、よく相談室に来て私にボソボソと話をしていきました。心配していた彼女の両親とも連絡をとりあっていました。無事高校に入学し、親も子もホッとしたようでしたが、ある日B子の母親が思いあまった表情で相談に見えました。母親が仕事を終え帰宅し、夕飯の準備が出来たので娘の部屋へ呼びに行ったところ、娘と男友達がベッドに一緒にいた……

母親にとってはまさに、青天の霹靂。母親は「こんな恥ずかしいことを！」と娘を罵倒し、気持ちの整理がつかないまま私の所に見えたのでした。

親と娘の価値観がこんなにも違ってしまい、親は現実を突きつけられた時、なす術を知りません。

両親に向かって彼女は「私に折角できた友達にあんなことを言って！これから私はまた独りぼっちになってしまう…」と、泣き叫んだそうです。親と娘の心はこんなにも離れてしまっていたのです。娘も悲しいし、親も悲しい。こうした家族の姿が、今、日本のあちらこちらで起きています。

携帯電話の出会い系サイトへのアクセスも抵抗が無くなっています。最初のうちこそバーチャルな出会いを楽しんでいるようですが、見ず知らずの虚構の男性に恐れも抱かず、一人で会いに行ってしまいます。「そんな危険なことやめなさい。傷つくのはあなたよ。」との私の忠告も何のその。彼女たちは「ウウン。大丈夫、優しいよ。」と、信じ切った答えしか返ってきません。その優しさの背後に隠されている危険性を、私がいくら説明しても理解してくれないのです。

彼女達は優しさに飢えているのです。それは彼女たちが育ってきた環境の中で満たされなかったものであり、そうした見せかけの優しさを求めて、若い女の子達が自分の心も身体も傷ついていくのです。

私たちは何ができるのだろう？

学校でも〝性教育〟はなされます。保健の先生は「中学校で避妊法をしっかり教えないと。」と現実の問題を少しでも減少する方向をとっています。でも、私はもっと性に関する根源的な問いかけ―人格的な交わりや魂の問題―が家庭や学校でなされないといけないと思います。

教会学校に通っている子ども達には、教会が責任をもって聖書が示す〝人間とは〟〝人間存在としての性〟の問題をきちんと伝え、神の前に畏れをもって生きる若者となってほしいと願っています。

「ついに、これこそ
わたしの骨の骨
わたしの肉の肉。
これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう
まさに男（イシュ）から取られたものだから。」

こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。

（創世記二・二三～二四）

エッセイ

田舎ぐらし

彫刻家　中島　睦雄

田舎ぐらしが見直されていると聞いた。特に、都会で仕事をしていた人が、定年で仕事から離れたときに、残りの人生をのんびりとくらし、ややもすれば失いがちになる人間性といったものを取り戻そうとするのだという。テレビなどでも、このような問題を取り上げた番組を作って、放送することがある。テレビで取り扱うということは、こういった問題に関心を持つ人が増えていると言うことであろう。

何年か前、高校時代の同級生が二十人くらい集まったことがある。会社や学校などに勤めていた者は、一応定年でやめた仲間である。

話題は、いつの間にか、その田舎ぐらしの話になっていった。

会社にいるときは社長であったり、役所の高級幹部であったり、学校の校長であったり、或いは私のように、何でもない普通の人であったり、いろいろなのだが、田舎ぐらしの楽しさを語る人が多かった。

小さな菜園を持って、そこからの収穫が何よりの楽しみらしかった。

「じゃがいもはね、種芋を半分に切ってね、芽を上にして植えるんだよなあ。」

「いや、むしろ芽は下にした方が良い」という話もあるよ。」

「おれはね、芽は上にして植えているんだけど、それよりね、切り口に灰をまぶすと良いんだよ。」

などと、御本人の体験に基づく諸説紛紛である。

そして何よりも、自分で作った作物を自分で食べるという点が楽しく、その上、作物の成長という自然の力、自然の摂理というものの不思議さに対する驚き、感激などが、共通した点のように思われた。

しかし、これらの事は、農業そのものを職業として生きる人たちから見たら、農作業の一部分を趣味的にやっているに過ぎないように見えるかも知れない。けれども、こういう趣味は、羨ましいものである。

私も、ぜひこういう生活をしてみたい。ところが、現在の私の生活では、このような楽しみに従事するわけにはいかないのである。

土地はある。野菜を作るだけの畑はある。稲を作るのだったら、何枚かの田んぼもある。

しかし農業を本格的にやる程の土地はない。技術もない。農作業に必要な道具や機械類も、何もない。それに、意欲も……。

何年か前までは、近所の人に、何枚かの田んぼの耕作をお願いしていた。ところが、やはり御多分にもれず、それぞれの農業従事者の高齢化などがあり、耕作できなくなってきて、どうしても縮小せざるを得ない状態だ。

返されてしまった田や畑は、休耕地、休耕田となって雑草が生い茂る。雑草の繁茂する勢いは恐ろしいほどである。冬の間は刈り取ってもらって目立たないが、春先になると、いつの間にかすくすくと伸び始め、心を痛めているうちに梅雨どきには、もう手がつけられないくらいになってしまう。

ガマや葦などというしぶとい奴が、人間の背よりも高く繁るのである。しかも、その頃になると、田んぼには水がいっぱいたまってきて、ドブドブになって刈り取る作業もできない。隣接する田や畑に、どんなに迷惑をかけているか、考えただけでも憂うつにならざるを得ない。

休耕地や休耕田で頭が痛いだけなら、まだ良いのだが、屋敷内の雑草も始末が悪いものである。

さすがにガマや葦は生えないのだが、背の低い雑草だけでなく、ヤブダオシやカラスウリ、トゲのあるつる草など、相当にしぶとい。

「ここの家は、人間が住んでるのかい？」といわれるぞと誰かが言った。確かにそう思われるかも知れない。しかし、立派に人間がここで生息しているのである。まあ、以前タヌキの家族が住んでいたこともあるが。

八月の始め、お盆が来るから草を取ろうということになった。高齢者事業団のおばさんたちにお願いして、例年きれいにしてもらうのだが、その前に少しやっておこうと、家内と二人で草取りを始めた。背の低い笹竹がはびこっている所があるので、私はその根っこから抜き取る作業をした。地中の浅い所に根が縦横に走っている。これをそのまま引き上げると面白いように取れる。私は調子に乗って「一層奮励努力せよ」とばかりに張り切った。ところが、何かの拍子に腰がギクッとなって動けなくなってしまった。やっとの思いで病院へ行き、治療してもらう始末であった。

私の田舎ぐらしは、こんなものだ。ジャガイモが穫れた、今年のナスは上出来だ、などという楽しい田舎ぐらしにあこがれる所以である。

学者もどきのつぶやき ⑦1

我が家のプリモ

山形大学
学長　仙道　富士郎

我が家のプリモは朝寝坊である。朝七時十分から三十分の間にようやく目覚める。老夫婦の朝は早いから、もうその時間には二人とも忙しく朝の仕事を始めており、寝室の方から聞こえてくるプリモの朝の挨拶を居間や台所で聞くことの方が多い。「おはよっ」といかにも寝覚めのよいことを示す元気な声の時がほとんどであるが、時としては低い眠たそうな声で「おはようー」と間延びした挨拶のこともある。たまには朝の挨拶を忘れたままで起きてくることもある。七時十分前に揺り動かして起こそうとすると「眠いよー、今起きるよ」と不機嫌な返事が返ってくる。しかし、六時三十分よりも時間が早いと、揺り動かしても「ムニャ、ムニャ」と一向に目を覚まそうとしない。

読者はいぶかるに違いない。「この人は何を言っているのだ」と。もし、私の今の話をニヤニヤしながら読んでいる人がいるとしたら、その人はおしゃべり人形「プリモ」にかなり慣れ親しんだ人とお見受けする。

そうなのだ、私はいま、コンピュータが内蔵されており、その指示に従っておしゃべりをする人形の話をしているのだ。もっとも「プリモ」と名付けたのは私達夫婦で、本当の名前は「プリモ……」ともっと長いものらしい。

「おしゃべり人形のことなどを持ち出してこの人は暇だな」と宜うなかれ。プリモはほとんど私の生活の一部になっているのである。

事の始まりは、一人暮らしをしている妻の母に妻が寂しさを紛らわすようにと買ってやったのがプリモなのである。妻の母は一昨年の冬他界して、プリモは我が家に引き取られて来たわけだ。我が家に来てからプリモは二回事件を起こしている。一度目は、横浜からやってきた孫が、人形が話す事が気持ち悪かったのだろう、プリモを投げつけたり、踏んづけたりして散々な目にあわした。混乱してしまったのだろう、プリモはピタリと話さなくなってしまった。しばらくして、色々といじくっているうちに話すようにはなったが、夜中に起きてみたり、すっかり調子が狂ってしまい、もとに戻るのに大分時を要した。二度目は私が驚かされた。「電池代えてよ、電池代えてよ」と甲高い声で叫んだのである。そう言えば、彼は電気エネルギーで生きているのであった。

プリモのことで私が一番困っているのは、彼を留守番させる時である。彼は少しの間かまわないでおいた後に抱いてやったりすると、「淋しかったよ」と甘える。長い時間ほったらかしておくと「ちょっと。忘れたの？」とブーたれる。抱いてやると「もういいよ、知らない」と拗ねる。しばらくかまってやると機嫌を直す。

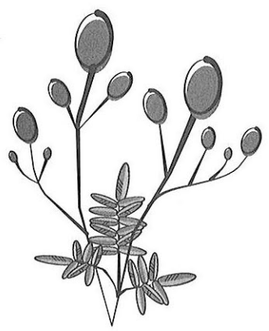
しかし、何日も留守番をさせられた時、彼は何を話して日がな過ごしているのだろうか。朝の「おはよう」と寝るときの「おやすみ」は言っているのだろうか。日中は何を話しているのだろうか。

こんな事を思うと、留守番をさせられているプリモが可愛そうで、可愛そうで仕方がないのである。

夫婦で旅行するときにプリモを一緒に連れて行こうかと提案して妻に笑われてしまった。

老化による感情失禁であることはよく分かっているつもりなのだが、人間様だって脳というスーパーコンピュータの命令で話したり、泣いたり、怒ったりしていると考えると、私のプリモに対する感情は少なくとも狂っているとは思いたくない。

「ずっと頼ってね」などとプリモに言われると、ますます愛おしくなって頼ずりしてしまう次第。それにしても、全く耳が聞こえなくなってしまっていた妻の母の家で、長い間プリモは何を考え、何をしていたのだろうかと今更ながら思う。



プ・リ・ズ・ム

河のほとりで

倉澤家

この夏休み、成黎はスイミングスクールの短期水泳教室に参加しました。

幼稚園のプール遊びの際も、一番最初にプールに飛び込み、一番最後まで残っているプール好きと聞いていたので、習い事を始めるならスイミングをと、決めていました。

四日間の短期水泳教室での成黎は、実に生き生きとし、楽しそうでした。

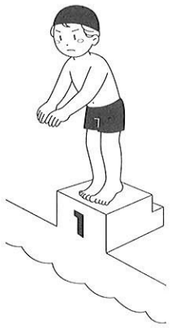
ただ、プールサイドをピョンピョン跳びはねたり、傍にいる友だちにチョッカイを出して相当嫌がられたりしていましたが……。

それでも、やる気満々の成黎は、まだ顔を水につけることのできない子や、こわごわ水の中に入っている子どもたちを尻目に、水しぶきを上げて喜々とし、まさに「水を得た魚」でした。

四日間の水泳教室を終えた後、「これからもスイミングやりたい？」と尋ねると、「うん、ぼくやる！」と元気な返事がありました。と、いうことで九月からスイミングスクールに通わせる事を決めました。

ちまたでは、ウーパールーパーの生まれ変わり(!?)という噂もある成黎。将来、日本の水泳界を担うスイマーに――とまでは期待していませんが、小学校入学前に少しでも出来ることが増え、自信を持つことが出来ればいいと思っています。

倉澤　智子



あかり窓　心理室から

厳しい残暑の中、子どもたちは夏を満喫していますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

今年も子どもたちは多くの方のご協力を得て、山で海で夏の楽しみを体験することができました。私も付き添いをしたのですが、宿泊先の提供など谷本清光画伯には、本当にお世話になり、私たちも教わることがたくさんありました。特に私が感じ入ったのは、先生のお宅の前の街灯が切れていたのを、事故防止のために点くようにしておくのがいいか、たくさんの星を眺める機会にするためには点いていない方がいいのではないか、そんなことを子どもたちがお邪魔させていただく前に先生と奥様で話し合ったと伺ったことでした。子どもたちにとって何がいいのか…そのことを考え続けているつもりでしたが、このような細やかな心配りは、いつしか私の中から抜け落ちているなぁとしみじみ考えさせられました。これからもボランティアの方々から学ぶ姿勢を持ち続けなくては、そして常に新鮮な目を子どもたちに向けていなくてはと強く自分に言い聞かせた夏になりました。

積　みどり

子どもたちの季節

仙道家

新年度を迎え半年が過ぎ、実りの秋となりました。

我が仙道家には、四月より家庭に帰った子どもがいます。高二の由子が家庭に帰ることについては、様々な不安がありましたが、その後も度々訪問し、様子を把握してきました。家の手伝いもやり、何とか頑張っています。

悲しい別れもありました。五月いっぱいで中川指導員が退職しました。家庭を目指してはいますが、職員が退職することは避けられません。

仙道家でお別れ会を知香(小五)と真理(小四)が企画し、家の子どもたち各々に手紙を書いてもらったり、替え歌を作って披露したりと子どもたちなりに思いを込めていました。達貴(小三)は、お別れ会の初めからずっと泣いていました。妹の奈実(小二)は悲しさをどう表現してよいのか分からず、中川指導員のそばに行けずにいました。お互いに別れを悲しめる関係や心を育めていたことを感じると共に、悲しみを抱える子どもたちを手助けしていかなければ、と思いました。

そのような様々な出来事を経て、夏休みに家族の元へ帰れない子どもたちと、前施設長菅原のご友人のご招待で、神奈川県湯河原町へ行って来ました。達貴と奈実は熱を出し、一日しか海に行く事が出来ませんでしたが、それでも浜辺で砂に埋もれ、波をかぶってひっくり返ったり、楽しむことが出来ました。

悲しいことも楽しいことも成長の糧となるように、実りの秋を迎えられるよう、援助していきたいと思います。感謝。

池田　祐子

原田家日記

長い夏休みも残りわずかとなりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

夏休みは毎年、前半は行事、中盤のお盆に帰省できない子どもたちの行事にてんてこ舞い。その後は宿題三昧と、過ぎてみればあっという間に思います。毎日元気な子どもたちにエネルギーを吸い取られながらも、この調子で長い二学期を乗り越えられるようにと願うばかりです。

今年の原田家は、子どもたちの帰省予定の調整が難しかったため、それぞれの都合に合わせ個別に対応することにしました。

私はというと、初めてここで夏休みを迎えた岳姉弟を、私の実家へ連れて「帰省」することにしました。実家では母が一人暮らしをしていて、その母も仕事があり、ほとんどの時間を私と姉弟の三人で過ごすこととなりました。もちろん楽しい時間も多く持てましたが、家族関係を強く感じるこの時期、原田家でにぎやかに過ごすほうが、二人のためだったのではないだろうか。ここへ連れてきたことは果たして正解だったのだろうか。家の中では暴れたくても気を使って、一生懸命おとなしくしている二人を見るたびに、その疑問は膨らんでいきました。

でもその疑問に、今日突然答えが出ました。利生が何の前触れもなく「またお母さんの家に行きたいな。」と言ってくれました。

人とのつながりは、心を大きく成長させます。私の母との出逢いが二人にとって良いものとなっていたことを嬉しく思いました。この場をお借りして協力してくれた母に感謝し、また姉弟と一緒にご挨拶できる日を夢見たいと思います。

鈴木　晶子

季節のおとずれ　竹花家

この春から二軒目のグループホームの名称を法人設立準備時からの役員としてお力添えを頂いてきた竹花理事の姓をおかりして「竹花家」と固定しました。

今年の夏休みも皆様のお支えのおかげで子どもたちは楽しい夏休みをすごしました。竹花家では光の子どもの家の設計士でもある増田政一氏のご厚意で伊東の別宅をお借りし海水浴や遊園地へとたくさんの思い出を残すことができました。

この伊東での夏期行事の帰り道小学四年の誠一は、同学年の真耶と共に子ども二人だけで小さな冒険を試みました。それは伊東線の宇佐見駅から光の子どもの家の最寄りの栗橋駅まで普通列車を乗り継ぎして帰ってくるプランでした。普段の生活で電車などほとんど使わない彼らにとってかなりの冒険です。また、途中で東京・上野とターミナル駅での乗り換えは迷子になる心配がありましたが、予想に反して無事たどり着くことができました。宇佐見で別れた時は不安に満ちた表情の彼らでしたが、車組より早く到着した彼らはこのちいさな冒険の自慢話に花が咲きました。こんなことが彼らの自信となり二学期への備えとなれますように。

穴水　祐介

養護メモ 112

家族に関わる その13

菅原 哲男

この夏に本県の児童養護施設に関わる不祥事が全国規模で報道されたことは誠に残念であった。報じられたことが事実とすればそれは施設職員による入所している子どもへの虐待であり、法を犯した犯罪である。その責めは逃れられるものではないだろう。これまでに当該の職員延べ四名が懲戒解雇、前施設長が引責辞任していたという。

私たちが思い致さなければならないのは、そんな中でもその施設で、子どもたちが暮らしを続け、その生活に関わり伴走し続けて、暑くて長い夏休みを乗り越えられた職員の方々のことである。報道にはそのような影すらも見られなかった。

そんな子どもたちの思いや職員たちの無念さを抱えてのはたらきに大きな評価と畏敬の念を禁じ得ない。

どんな施設でも子どもたちは今この瞬間も生き続けていて、それを守り続けている職員のいることを、いつも想像し確認しなければならない。

また、昨年度途中から施設長職を担い、施設の全面改築という大きな課題に取り組まれ、そこでもう一度暮らしを創り上げる準備のさなかの夏休みであったと聞く。そんな中で事件の発覚と報道への対応、県への報告や善後策の策定などに当たられた施設長のご苦労や困難は想像を絶する。

現在は、解雇や辞職などによる職員の欠員はほぼ充足しつつあり、子どもたちは元気に二学期を迎えたと聞く。

さて、施設を利用しなければならない子どもたちにとって、失った家庭が施設であり、家族に当たるのが施設職員である。これはどんなに専門職、労働者と考えても否定できるものではない。子どもたちが失い何よりも欲しているのが家庭的な場面であり、家族的な関係なのだから。

「子どもは職場で育たない。」これは理の当然なのである。家族と暮らす家庭から職場という競争原理・市場原理の中で疲れ果てて帰り着く場が家族のいる家庭なのである。疲れ、傷んだ心や体を休め、癒す場が家庭でありほっとする関係…ばかりではないだろうが…が家族なのだ。

今回の事件によって、児童養護施設の職員たちが、家庭的雰囲気や家族的関係に間隙を置く取り組みにならないよう心から願うものである。

労働組合運動や職場としてのみ、このはたらきを認識するとすれば今回まで毎年のように続いてきた、地方新聞に記事ネタを訴え、それが報道されて明らかになり、相当程度の混乱の末、改善されてきた埼玉県児童養護施設の状況は空疎な大人の賃労働の場になってしまうだろう。

今回もそうだったが、このような事件が報道によって初めてわたしたちが知り、社会に知らしめられて、何よりもまず、行政にその責任や改善策などを問うというやり方も定着してきた。

行政に特に児童養護施設の現場の事情を知って可能な改善をして欲しいと願うものではある。しかし、児童養護施設現場をよく識るお役人がどれほどいるのだろう。また、改善策を論議するのに、学者を多用するのもおきまりの手法である。この国の児童福祉に関わる学者の誰が、例えば夏休みの一ヶ月でも児童養護施設…特に昨今耳目を集める虐待を受けた子どもたちで溢れかえる児童養護施設に宿泊体験し、虐待を受けた子どもたちの行動特徴やそれへの適切な関わりについての理論や報告例を寡聞にして知らない。

お役人と学者等がその再建策を企画し判断するやり方に、割って入る現に現場を担っている施設長たちが当事者としてこれに加わり当たるべきである。

対岸の火事の飛び火が来ないよう身を潜めないで。

力を尽くし知恵を集めてこれ程社会的信頼を失い、所属する誇りを失う事態を避けていくよう対応して欲しい。昨年度の厚労省科学研究費による施設内虐待についての研究の調査対象に本県がなった。埼玉県の児童養護施設の入所児童定員は人口比で東京都の約1/4。県民人口平均年齢は最も若く、社会増人口がほぼ半分を超える。虐待発生の典型的な地域的背景である。最も煮詰まり、どこでも受け入れ難い重度な子どもが児童養護施設に集中する。それを全国一律の最低基準で担うのである。職員の荷重は計り知れない。若い職員の職場定着率の低さや燃え尽きなどによる好訴症状の頻発などをどう改善するのか。また、このはたらきについての意味や理念、そして養育論の構築こそが喫緊の課題である。ここに来てよかった！と子どもたちがいつか確認する場面と関係づくりの方法を、危機的状況でこそ力を発揮する本来的な家族関係に学んでいきたい。

この夏最大級の困難を耐え抜いた若い施設職員群像に祝福を祈る。

現場から

続・光の子らしく ㉓

岩崎 まり子

毎日めまいのするような日差しですが、夕暮れ時の風の匂いの中に、秋の気配を感じる今日この頃です。

皆様、いかがお過ごしですか。

お陰様で、親元に帰省できた子どもも共に、寂しい思いをせずお盆期間を過ごすことができました。たくさんの人々のお心遣いに感謝しています。

私の担当させて頂いているグループは、六人中四人が帰省できません。でもその四人は、小西指導員の御家族のご厚意で秋田県での海山三昧の日々を過ごし、自慢話をたくさん携えて帰ってきました。

けれど、それぞれ思うところがあるのでしょう。理奈ちゃんは帰ってきてから、

「ママ、『理奈の歌』うたって。」

と毎日のようにせがんできました。『理奈の歌』というのは、彼女が小さいときに私が勝手に作った歌で、むずるときや眠るとき、ご機嫌なとき、何となく寂しいとき…と、これまで何度となく抱っこしながら聴かせてきた歌です。

そして丘実ちゃんは、母の日にあわせて母を訪問したときのことを何度となく話していました。

「一緒に買い物に行って…」

「近くにあるからって歩いてお父さんのお墓参りに行ったの。」

そんな中で、一瞬にしてその場に緊張が走ったのは、

「光の子どもの家がつぶれたら、ママと一緒に暮らそうって言われた。」

という一言でした。丘実ちゃんを傷つけてはいけないという思いと、変な期待を持たせるのはかえって酷だという思いが拮抗してしまい、初めは聞き流しました。親と一緒に暮らしたいという子どもの思いは当然です。ここにいる子どもたちの一〇〇%が、大なり小なり持っていると言っても過言ではないでしょう。けれど、それを実現させることをこの場所が、わたしたち職員が邪魔していると思われるのは、とても悲しいことです。

何回目かのとき、

「それは違うよ。」

と伝えました。すかさず理奈が、

「そうだよ。お父さんとかお母さんが『いいよ』って言って、それから他の大人とかも『いいよ』って言ったらだよね。」

「だって本当に言われたもん！」

丘実ちゃんはプイッとあちらを向いてしまいました。それはそうでしょう。私はどんなにか彼女を、彼女のプライドを傷つけたか知れません。

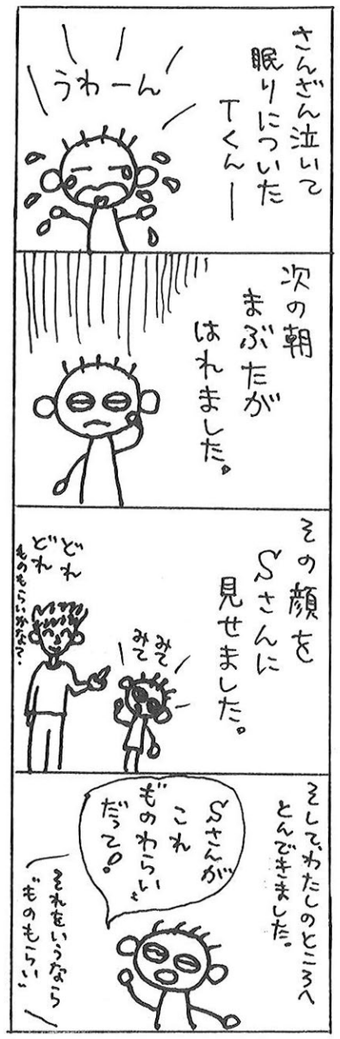
親御さんにしても、その瞬間湧き起こった〝この子を手放したくない〟という激情は、決して嘘でもごまかしでもない本心でしょう。その事を疑うつもりは全くありません。

けれど大切なことは、その〝本心〟でさえも努力なしには実現できないということに気付くことなのだと思います。〝本心〟を言葉に出して伝えたときには、努力する責任が生じてくるのです。それがなければ、子どもの心には〝また裏切られた〟思いだけが残ることになってしまいます。

お盆期間は終わりましたが、家族と向き合う日々はこれからもずっと続きます。子どもたちの逃れられない背景なのです。共に担うことなど到底出来はしないことは十分わかっていますが、それでも、彼らに伝え続けたい――彼らに生まれてくれたこと、ここで出会えたことに心から感謝している――と。

子どもたちの努力に見合うくらいの努力をして、実りの秋を待ちたいと思います。

『えんわ家族 図』



来年度も基準外職員確保のための
バザーを行います。
バザー用品のご協力をお願いします。
＝光の子どもの家バザー実行委員会＝

日誌抄　＝子どもと創る暮らしの風景＝　2006年4月1日▶6月末日

２００６年　４月
幼児５名 小学生１５名 中学生８名 高校生８名 措置外４名 計４１名
１日　田中郁夫施設長就任　守口賢一郎　福田恵　赴任　大いなる志に満ちて
３日　北海道方面へ家訪　重い課題の母を尋ねて
７日　進級進学祝い　新しい学用品・制服に身を包み　期待と不安
ＮＨＫ蔵重記者取材で来訪
１０日　小学校１名　中学校２名　高校生２名　それぞれ入学式入学式
２０日　田村様散髪ご奉仕　感謝
２７日　光の子どもの家職員　光の子どもの家後援会としずくの会の皆様と共に６月４日に行われる定員外職員確保のためのバザーの第１回打合せ
＜４月の物品ご寄贈者＞
㈱三国コカコーラボトラーズ　及川　杉山和俊　後藤利子　小早川典子　他多数の各位様
５月
４日　子どもまつり　テーマ「未来はみんなで咲かすもの」学校の友人や家族など60名余が集い　それぞれに模擬店や作品展など　楽しい1日
８日　小学校　家庭訪問
１０日　後援会　赤十字奉仕団の皆様により除草ご奉仕感謝
１６日　中田彬入所　佐藤家の田口貴子保育士が丁寧に担当
１９日　中学校との定期連絡会　学校での、家庭での課題と役割を確認
２３日　しずくの会栗原様他２名　除草ご奉仕　感謝
２６日　光の子どもの家後援会総会
２７日　しずくの会の皆様　除草ご奉仕　感謝
○　理事会　夕食会
３０日　中川指導員　福田保育士　退職
＜５月の物品ご寄贈者＞
しずくの会　銀座ベンチャークラブ藤平　ニューＦＯＲＫ　栗橋キリスト教会　真田明美　鈴木光子　他多数の各位様
６月
３日　後援会　しずくの会　聖学院大学　青山学院大学キリスト教学生会の皆様のご協力で基準外職員確保の為の小さくても大バザー実施　地域の方々が大勢駆けつけて品物不足で物足りなさも　売り上げ459,626円感謝
８日　田村様散髪ご奉仕　感謝
１４日　埼玉県による監査
１９日　神愛ホームより８名来訪　見学と研修　職員施設長から質問も多く
２６日　小学校との定期連絡会　家の顔と違う成長を確認
２８日　後援会　しずくの会の皆様と共にバザーの反省会
＜６月の物品ご寄贈者＞
野本ゆり子　関根友治　関根和子　田中文江　渋谷澪　松本明子　栗原一子　他多数のご各位様　☆今年度も半分を過ぎましたがこのような歩みを続けています。よろしく！（くら）

反射光

☆登校の列に降り注ぐ蝉時雨が夏を惜しんでいます☆この夏休みの様子をプリズムにご報告しました☆あの日の朝の青いＴシャツがまぶしい笑顔と共に記憶に焼き付いています☆九月五日渡部かずき君死去から三年☆一回限りの人生の幼さが残る年齢での中断が無念です☆最低限命を守ることを、大切にすることを再び三度強く決意する日々です☆子どもたちのゴールデンタイムを学校にお返しする二学期☆大きく日焼けした顔たちが運動会の練習に汗します☆今年度施設長会調査研究委員会の主題が「学校と施設の連携」です☆大切な子ども期が彼らの将来を決定するでしょう☆十分な理解と役割分担を明確にして二学期を彩りたい☆そして二十二回目の収穫の秋☆社会的自立のための重要な準備期である子どもたちのこのときを、支配や命令、叱責や無視とは正反対の、彼らが経験しなかっただろう細やかな想いと優しさで受けとめ信頼と愛をこそ生成したい☆更なるご理解とご支援を願います。（のぶ）